

募金活動の趣旨

終戦直後に吉田茂の懐刀として連合国軍最高司令官総司令部と渡り合い、彼らをして「従順ならざる唯一の日本人」と言わしめ、その後、初代貿易庁長官・初代東北電力会長などを歴任した白洲次郎の山荘が、2006年に山形県蔵王で“発見”されました。

昭和20年代後半に蔵王を訪れた白洲はその魅力に憑かれ、蔵王を「東洋のサンモリッツ」にしようという構想を立てます。山荘はその構想実現の先駆けとして昭和32年(1957年)、おそらく英国留学時の経験に基づく彼自身の着想に沿って建てられ、「ヒュッテ・ヤレン」と命名されました。「ヤレン」の意味は「スキーはうまくやれん」に由来するといひ、そこには彼が住んだ「武相荘(ぶあいそう)」の命名にも通じる、彼特有のユーモアが感じられます。

山荘は豪雪を考慮した1階無筋コンクリート造・2階木造の床面積約70㎡という小さなものですが、現オーナー三宅氏によって丁寧に維持され、若干の改装を除き、外観を含めてオリジナルの状況をよく残していると推察されます。当時の彼の社会的地位から考えれば驚くほど小さなものですが、簡素・質実で、2011年3月11日の東日本大震災にも耐え、多くの人たちにそれと気づかれぬまま、いまもひっそりと蔵王の樹林のなかに佇んでいます。

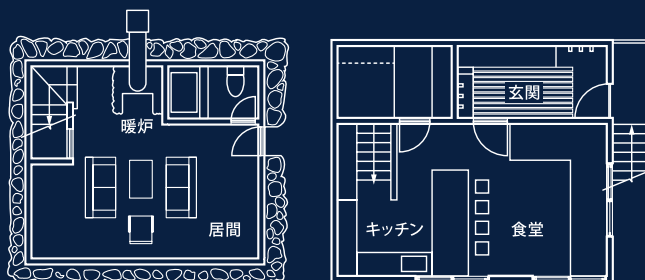
私たちはこの事実を知り、ともかくこの山荘を「残したい」と思い、将来の使い方も解らぬまま「残す」ことを決意しました。その理由は、この山荘が白洲次郎によって建てられたものだからというだけでなく、その何気ない優しい佇まいが彼の愛した山形・蔵王の風景、延いては日本固有の美しい風景を色濃く残していると思えたからです。「東洋のサンモリッツ」という彼の構想は経済一辺倒の開発の波に飲まれて挫折しました。しかし、立案から半世紀を経たいま、その構想を現代において捉え直し、この山荘を残すことを通して彼の想いを受け継ぎ、更に蔵王という地域を超えて、日本にまだ辛うじて残る美しい風景を再生していくきっかけにしたいと、私たちはそう強く考えているのです。

将来的な一般開放に向けては三宅氏の快諾を頂き、活動の主体は私たち「NPO法人元気まち・ネット」が担うことになりました。保存・活用に向けては資金的に難題があり、ついでには皆様のご協力を賜りたく、ここに募金活動を展開することになりました。何卒この趣旨にご賛同を頂き、ご協力いただきますよう、心よりお願い申し上げます。

2012年2月

NPO法人元気まち・ネット／東京 代表 矢口正武

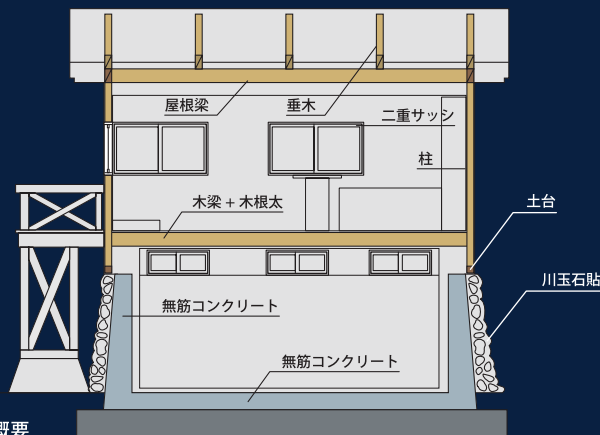
現状評価と報告



1階平面図

2階平面図

豪雪地帯であることから2階に玄関と食堂兼寝室、1階に大きな居間とトイレ・浴室があります。居間には当時は暖炉がありましたが、現在はストーブに置き換わっています。
(※1階平面図は、地元の方々の話を元に建設当初の状態を再現した図面です。現況は、3つの部屋に仕切られています。)



構造概要

構造は1階がコンクリート造、2階が木造となっています。1階は厚さ約40cmの無筋コンクリート壁で、外面には現在では貴重な川玉石が貼られています。2階の木造は当時の日本には珍しい、柱をあらわし(外部に露出させる表現)にした欧風の外観です。東日本大震災には耐えましたが、保存活用にあたっては詳細な耐震診断を行い、耐震補強の必要性を検討します。

その他、二重サッシなど、当時としては珍しく画期的なアイデアが組み込まれていることも分かってきました。



1 キッチンには建設当初のままと思われる。人造大理石研ぎ出しの流し台は珍しく、既製品ではなく製作品と考えられます。ミニキッチンの先駆けといえます。

2 5 柱をあらわしとし、その間にフレキシブルボードを貼った外観。フレキシブルボードは当時もありましたが、これを外壁に使用することはかなりモダンなことでした。この提案に大工は驚いたことでしょう。このような外観を作る場合、漆喰などを塗る湿式工法が通常でしたので、既製のボードを張る乾式工法が先駆けといえます。

3 当時のドアハンドルは、ノブタイプ(握り玉)がほとんどでした。山荘の改装工事の時に取替えたのかもしれませんが、オリジナルとも考えられます。オリジナルとすると当時の最先端といえます。

4 山荘周辺の豊かな自然。四季折々、様々な表情を見せ、訪れる人を楽しませてくれます。

6 暖炉の排気に使用していた石造の煙突は、当時の姿を残しています。